
HRUNNAD ~もう一つの世界 ハルヒ編~

brades

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HRUNNAD ～もう一つの世界 ハルヒ編～

【NZコード】

N8305M

【作者名】

brades

【あらすじ】

淡々と降りしきる雨の中、俺は無人の教室に呼び出された。普通だったら何があるに違いないと疑念の耳をピンと立てる俺であったが、何であろう、あの人の頼みなんだ。教室の扉を開けた先には・・・

1～序章～（前書き）

これは、とあるアニメを参考にして書いた、涼宮ハルヒの憂鬱の一
次創作小説になります。

作者自身はこの作品に感動し、どうしても書きたくなったことから
とmeyeにて日記公開をさせていただきました。

まだまだ新米ですので、文章構成などに不備などあるかと思します
が、暖かい目で見て頂けると光栄です。

淡々と降りしきる雨の中、俺は無人の教室に呼び出された。普通だつたら何かあるに違いないと疑念の耳をポンと立てた俺であったが、何であろう、朝比奈さんの頬みだといつのだ。ここで退いては男が廢るところのものや。

「どうしました、朝比奈さん？ 何か俺に用ですか？」

朝比奈さんは、少し暗い顔をして、少しづつ俺に近づいてきた。・・・何かまずい問題でもあったのだろうか？

そして彼女は俺の前で止まり、いつもとは違う戸惑いの顔を見せつ

つも大きな声で（朝比奈さんに）しては、だが）俺に向かつて話した。

「キヨン君・・・私、キヨン君のことが好きなんです！ 私と付き合つてください！」

・・・はい？

何だ？ 俺は今何を言われたんだ？ 付き合つてください？ 俺が？ 朝比奈さんと？

暫しの沈黙に耐えられなかつたのか、朝比奈さんは顔を真つ赤にして俯いた。

「・・・す、すみません・・・。困りますよね、いきなりこんなこと聞われても・・・。でも・・・言わざにいると苦しくて・・・。」

いや、その、困るとか困らないとかではなく、俺は純粹に動搖しているんですが・・・

そう思つたが、声に出すのは余りにも残酷なことに思えて、何か喋らねばとこゝう思いから口が勝手に動いた。

「あへ、あの・・・」

「は、はこつ、なんじょうかつ！？」

貴方まで動搖してどうするんですか、告白したのは貴方ですよ~。

「あの、ありがとうございます。でも俺達、今までSOSの団として活動してたつていうか何て言つか・・・」

「・・・せうですよね・・・」

「ま、待つてください。俺は貴方が嫌いなんて言つてないですよ。ただ、恋愛の対象として見てなかつたといいますか・・・いや、こ

ういつ

言い方は失礼ですよね。」

俺はこの時決断するべきじやなかつたのかもしれない。でも、俺は自分ではよく考えたつもりで言つたんだ。

「・・・それでも良かつたら、付き合つてみますか？」

「・・・え・・・？」

「お互いのこと、まだ知らないことだけです。だったら、その間の時間彼氏彼女として過ごしてみるのも悪くないかなって。」

「そ・・・それじゃあ・・・」

「今から俺の彼女ってことで、良いですか?」

俺は自分で驚きながら自然な微笑みをした。朝比奈さん。

「・・・・・・・・・!」

突然、朝比奈さんはすすり始めた。そして刹那。

「ふええええええええ!・!」

盛大に泣き始めてしまった。・・・えつ、俺、何かまずいことでもした?俺は朝比奈さんを振ったんじゃなくて、受け入れたんだよな?ならば何故泣く? Wh y!?

「・・・・・『めんなさい・・・涙・・・止まらないですう・・・・・」

だから何で!?

「夢みたいです・・・・・・・・嬉しくて・・・・・」

嬉し泣き・・・か。朝比奈さんらしいな。そんなに俺のことを思つて貰えるなんて、なんて幸せ者なんだ、俺は。

涙が終わつた後、俺達は部室に戻つた。
その時は、朝比奈さんのことでの頭がいっぱいだつたせいか、時間が経つのが異常に速く感じた。

あつといつ間に長門の本を閉じる音と共に下校時刻となる。

朝比奈さんと帰ろうか、そう思つた矢先、ハルヒに声をかけられる。

「ちよっとキヨン、来なさい。」

おこおこ、いい加減俺の首根っこを掴むの止めてくれ。マジで伸びちまうつて。

螺旋階段に連れて来られたが、ハルヒは中々言葉を発しようとしない。

・・・帰つていいかな、俺。

「あんた、みくるちゃん付き合つてになつたんだって？」

・・・は？

何でコイツがもう知つてるんだ？まさか、朝比奈さんと俺のやり取りを盗み聞きでもしてやがったのか？

「違つわよ。みくるちゃんがずっとあんたばっか見てたから、問いただしただけよ。」

くれぐれも気をつけろよ。あの方は俺みたいに接すると泣き出すぞ、絶対。

「ま、あたしは人の恋愛に首突つ込むような女じゃないから。せいぜい頑張りなさいよ。」

「へいへい、わかつてゐよ。」

終始落ち着かないような、ムスッとしたような表情でいたハルヒは、
今日初めて笑顔を見せた。

「ただし、一個条件。みくるちゃんは大切なSOS団団員なんだか
ら、泣かせるようなことがあつたら許さないからねっ！」

「わーつてるよ・・・？」

ハルヒはその言葉と共に足速く去つていった。

だが、俺は生涯あのハルヒの笑顔を忘れることがないだろう。
何故つて？決まつてるだろ。あんな作り笑顔をみたのは初めてだつ
たからや。

2 ～憂鬱な日曜日～

日曜日。

朝比奈さんはどちら都合があつて遊べないらしい。やれやれ、市内探索パトロールも無いし、絶好のテー^ト日和だと思つたんだが・・・。

家で「じる」をしてようかと思ったのだが、何故か歩きたいと思つて、一人で公園をぶらついていた・・・すると。

「ん？」

あれはハルヒじゃないか？アイツがこんなところで一人でいるとは・・・珍しいな。

「おーい、ハルヒ！」

結構なボリュームの声で呼んだつもりだつたのだが、聞こえていいのか？それとも無視したのか？

・・・あいつがSOS団団員の声に無視するはずは無いし・・・う

ーむ。

ま、考えるより動けだ。

その後、ハルヒを呼んだ俺はいつも通りの反応を示し、ベンチに腰掛けた。

「日曜なのに何やつてるのよ。ちやんとみくるひやんと腰あげな

「いやダメでしょ？」

「バーカ、余計なお世話だ。」

「…………やつよ、ゴメン…………。」

「…………あ？」

「…………何？ハルヒが素直に謝るだと？」「イツ、毒キノコでも拾い食いしたのか？わざわざの言動といい、今日のハルヒは珍しいことだらけだな。」

「…………ねえ、みくるちゃんとは、上手くやつて行けやつ。」

「まあ、何とかな。眞面目だし優しいし、すぐ赤くなるからついと氣を使つけど。」

「やつやつ、でもやつこいつがまた萌えポイントなのがねえ。」

「やれやれ、『イツは朝比奈さんを『萌えの化身』かなんかと勘違いしてるんじゃないか？』そう思い、唐突に笑つてしまつ。」

「…………何よ。」

「ああ、いや、お前つて本当に朝比奈さんが大好きだよなつて思つてな。」

「…………あ…………そりでも、ないわよ…………。」

またハルヒが曇つた顔を見せる。どうなつてんだ？今日のハルヒは

喜怒哀楽が激しそうでもんじゃねーぞ。

暫く経つと、ハルヒは唐突に「こんなことを言こやがった。

「……ねえ。」

「ん?」

「みぐるわやんと……キスした?」

「……はあつー?」

いきなり向を言こ出すんだ、ここつま。危うく「ホールー吹く」とこだつたぞ。

「し、してねーよ、んなもんー。」

動搖のあまり、歯切れの悪い言葉になってしまった。勘違いするなよ?

「ふふつー。」

ハルヒは笑みをこぼしながら吹き出しあがつた。わ、悪かったな、ヘタレだ。

「ダメよ、もつとコードしてあげなきや。」

「んなこと聞かれて……俺、女の子と付き合つのは初めてだからな……。」

いかようにも勘違いしそうな文章である。やー、ダサいとか言つた。

「ふうん……。」

ハルヒはまた少し考え、更に驚きの言葉を俺に投げかける。
後にも先にもこんな大胆な奴はコイツぐらいなもんだよ。

「……じゃあ、練習してみる? キスの練習。……あたしヒ。」

「……ああ! ?」

いかん、茶化してやがるな、コイツ。顔にそう書いてある。その証拠に、なんだその含み笑いは。裏があるのバレバレだぞ。

「」は落ち着け、落ち着くんだ俺。

「あたしをみくるちゃんだと思ってさ。同じSOS団の仲間だし、あたしは付き合つたこと何回もあるからあんたより先輩だし。」

何かある。絶対何かある。そう思った。

「……ね?」

この顔を見るまでは。

そのハルヒの顔を見た瞬間、俺の目はコイツの顔に吸い込まれていくような気がした。

自分の意思とは関係なく、ハルヒと俺はお互の顔を近づけていく。
そして、唇と唇が重なるつとして……

「……はー、」はまでー。」

ハルヒは我に返つたよつて俺の頬に手を当て、俺との距離を離した。

「練習なんだから、しちゃつたらダメじゃない。」

「あ、ああ・・・。」

「それとも、まさか本気だつた?」

ハルヒはまたあの笑顔を俺に向けた。ま、そんなところだつと。だが、こうやってハルヒに茶化されるだけなのも癪だ。せめてお前の思い通りじやないくらいの言い訳はしたいもんさ。

「んなわけねーだろ、バーカ。」

そして時は夕暮れ。随分長居したな。

「ま、60点つてとこね。」

「へへへ。」

「じゃあね。」

「おう、また明日な。」

俺はハルヒと別れを告げ、家へ向かった。
ハルヒの後姿が、印象的だった。

3 「現実へ現実逃避」

翌日。

俺はいつも通り学校へ行つたのだが、ハルヒは居なかつた。おいおい、またあんなへんちくりんな世界に飛ばされたつてのは嫌だぜ？

どうやらそんなことはなかつたらしい。

クラス全員が、俺とハルヒの机を見ながら何か言つてゐるのだ。・・・
・何だ、鬱陶しいな。

「キヨーン。」

谷口が現れた。

しかも、極上のにやつつき顔だ。

廊下に出た俺達は、やはりこの話題になる。

「何なんだ、お前まで。」

「隠すなつて。お前・・・」

その話を俺は耳を疑つたね。

「は？俺とハルヒが？」

「もつ学校中の噂だぜ。昨日涼宮とキスしてたつて。」

・・・まさか、あの公園のことか。
誰かに見られてたのか。やれやれ。

「あー、いや、あれは誤解だ。」

「とほけんなつて。ま、最近変だとは思つてたぜ。何か妙に楽しそうだしな。」

「だからしてないつて。大体、俺が付き合つてるのはハルヒじゃない。朝比奈さんだぜ？」

「ああ？お前とあの朝比奈さんが？マジか？」

「・・・そんなに意外かよ。」

ま、お前も朝比奈さんを羨拝していたみたいだが、俺の彼女になつてたつてわけだ。残念だつたな。
・・・なんて言えるはずもなく。

「だつてお前ら、全然タイプ違つじゃねーか。お前のタイプはまつと変な奴だろ？涼宮なら納得できるけどな。」

「勝手に決めんなよ。それにその噂も嘘だ。」

すると、一つだけ気になつてくることがあつた。

「なあ・・・この噂つて朝比奈さんこも・・・」

「まあ、学校に行きや嫌でも耳に入るだりつよ。」

「・・・ちゅ。」

それが一番怖い。朝比奈さんで懲想がされたなんて知られたら、俺はもう生きていけんだら。

そんな話をしていると、アイツが登校してきた・・・と黙こきやこちり近づいてくる。

「ああ、いたいた。」

ハルヒだ。二三のしながり歩こむへる。おこおこ、その笑顔、若干怖いぞ。

「お、おひ、ハルヒ、おはよー・・・」

「ちゅっと付き合つてよ。時間は取らせないから。」

セツヒで俺の会話を遮り、谷口の耳を掴んで強引に連れて行った。

「ちゅつ、俺何もしてないぞつーー?」

「お、おこ、ハルヒ、お前・・・」

すでに去っていた。

その後、後を追うように俺は急いだが、途中で朝比奈さんと会つ。・・だが、生憎朝比奈さんと喋る気力は無かつた。

「ごめん、朝比奈さん・・・今までゆつくり話そつ。

そうして中庭にたどり着いた俺は、谷口に迫るハルヒを見て何故か焦りを覚え、柱に隠れた。

「なあ・・・正直、信じられんのだが・・・。」

「何でよ。あたしの言つてること、そんなにおかしい?」

「つづーか、今まで全然そんな雰囲気なかつたどりうか、ジャガイモくらいにしか思つてなかつただり、お前。」

「あれか?近すぎて氣づかない想いつて奴?」

「・・・そうね・・・似たようなものかも・・・。」

そして俺は次の行動に驚愕する。

「ねえ・・・わかりやすい証拠、見せてあげようか?」

そしてハルヒは谷口に顔を近づけ、唇を近づけ・・・!!

「・・・ちょっと、ちょっと待て!-!」

谷口はハルヒを制止した。未だ強引に迫りうとするハルヒの手首を掴み、引き剥がす。

「・・・。」

ハルヒは何も喋らない。・・・顔も見せない。

「やっぱ変だよ、お前。本当に俺が好きなのか?」

「・・・じつこつ意味よ・・・。」

「間違つてたら謝るがな、涼宮、お前つてキョンが好きなんじゃないのか?」

「・・・」

何?ハルヒが?俺を?

「な、何言つてんのよ。あたし・・・あたしは・・・。」

もう、俺は止まれなかつた。

盗み聞きしている俺が悪い。もう出てかなければならぬ。そう思い、俺は前に出た。

「・・・キヨン。」

谷口はやっぱりわかつていたらしい、俺がいることを。だが、ハルヒはそうではなかつたようだ。

「・・・あつ!・・・あ・・・。」

灰色の雲が、全てを切り離したかに思えた。

俺は谷口に連れられて、階段に腰掛けた。ハルヒはあの後、走って逃げてしまった。

「あいつ、自分とお前の尊を消したくて、俺と付き合おうとしたんだよ。」

尊・・・ああ、あのどりでもいい尊か。

「尊なんか・・・」

「ただの尊な、こんなことしないんじゃないのか?」

その言葉に俺は返すことができなかつた。

そのまた翌日。

睡眠時間もままならず、ああ、遅刻決定だと思いつつ登校するとい、そこにはハルヒがいた。

「遅刻よ。」

相変わらずの作り笑顔。こんなハルヒは見たくなかった。

それでも真実を確かめるべく、俺はハルヒと中庭に出た。そう、あいつは一体・・・。

「なあ・・・は」

「あのさあ、谷口が言つたこと、聞に受けないでよね。」

「ハルヒは俺が好きなんじゃないかとかの、あの話か。ま、信じじ、信じじかもいねーわ。」

「あんたとみくるちゃんが仲良さそなのを見て、あたしも久々に彼氏作つてみようかなあと思つて、誰にしようか迷つてたときに偶然あんたと一緒にいた谷口を見つけて、谷口にしどうかな、と想つてさ。そしたら・・・」

「・・・お前！・・・」

「・・・え？」

ハルヒはキヨトンとした目で俺を見つめた。そりやそりや、あの撮影の日以来初めてコイツに怒鳴つたんだからな。だが、俺は何故かこの時怒りが収まらなかつた。谷口にしどうかな、だと？お前はそこまで堕落した、適當女だつたのか？

「お前・・・そんな簡単な気持ちで男作るのかよ。」

高校入学以前、つまり中学生時代のハルヒだつたら、告白されたら全員OKだつたらしいから、そんな感じだつたのかもしれない。だが、今のハルヒは違う。常識もある程度できてきて、やつと普通な生活も順調になつてきたとこなんだ。

それなのに、コイツはそれを無視しよつとした。それが許せなかつた。

ハルヒは暫く訳も分かつてないような素振りをしたが、やがてジト目になり、ハルヒらしくもないことなことを言いやがった。

「……そつちにんじん余計なお世話よ。」

「……ぐー。」

「あなたはみくらむりやんの」とだけ考へていればよいの。ね?」

「……え?」

またしてもあのハルヒの笑顔。おいおい、お前の血量の100Mの笑顔はどこ行つたんだよ……。

「彼女心配させたら最悪なんだからね。じゃあね。」

「うわもひかで、返す言葉もなかつた。」

わざ、ようやく朝比奈さんとのトークの日がドキれた。

朝比奈さんには聞くと、遊園地やら映画館やら行くより、俺と少し歩きたいと言つ。誰あの朝比奈さんの頬みだ。

すぐ近くにあつたクレープ屋でクレープを一つ買い、朝比奈さんに渡した。

朝比奈さんは笑つて貰つてくれた……のだが、何故だつて、俺の顔は曇つていた。

それに気がついたのか、朝比奈さんも途端無口になる。どうしよう……聞がもたない。

すると、朝比奈さんが先に話しかけてきた。

「…………君。」

「…………え？」

本当に久しぶりに本名、しかも下の名前で呼ばれた俺は、今までキヨンとしか呼ばれていなかつたため、驚いてしまう。

「名前で呼んでみたかったんですけど……嫌でしょうか……？」

「そんなわけないですよ。ただ、今までキヨン、で統一してたので、今更本名で呼ばれて純粋に驚いたんですよ。」

「や、やつですね。今更ですね、キヨンくわ……」

「ははっ、やっぱりキヨン、の方が呼びやすいんじゃないですか？」

「やつみたいですね。」

朝比奈さんに、そして俺にも笑みが戻った。相変わらず朝比奈さんの笑顔は美しいね。

「……良かつたら、私のことも”みくる”って呼んでください。」

照れくしゃみに頬を染めて朝比奈さんは言いつ。えーと、何と言いつか、これで退いたら男の俺としちゃダメ人間なわけだ。

「あ、はい。……じゃあ、”みくるさん”」

ハルヒみたいにちやん付けで呼べないし、かと喧つて呼び捨てにすることはいかん。かなり違和感があるが、これで満足してくれるならこれでもいいや。

「・・・えへへ・・・。」

「ううつー、朝比奈さん、その恥ずかしそうな笑みは犯罪ですっ！」

その後、朝比奈さんと俺はプラプラ公園を歩いたり、ショッピングなどを満喫し、夕刻になつてバス停まで送りに行つた。

「じゃあ、いいで。」

「はー。」

「キヨン君・・・また、明日。」

「はー、また明日。」

空を見ると、夕立が来そつだつた。

夕立がやつてきた。

ぽたぽた、といつ擬音語はほんの数十秒だけで、その後一気に土砂降りと化した。

「やべーな。一回姫門のマンションで雨宿りでもしたけど、ひづか？」

「おわつ……ってシャンパンー?」「さうやって走っていくと、田の前を見當

シャルミセンは一瞬俺の顔を確認したかと思つと、坂を登り始めた。
しかも全速力だ。

「お、おい！どうしたんだよ、今日は日曜だから学校は休みだぞ？」
かといってこの大雨の中放つておくわけにもいかない、か。 しょうがない、後を追うか。

しばらく坂を上がってこると、本当に小さな広場に出た。
そしてシャミセンも止まる。

そこで目にした人物に、俺は驚きを隠せなかつた。

・・・そう、ハルヒである。

何故こんなとこにハルヒがいるんだ?しかも土砂降りだつてのに傘

「一つ差を出す」に呆然と立ちつくしている。
とりあえず顔をかけてみないことには始まらないな。
恐る恐る近づき、俺は喉から声を出す。

「……ハルヒ。」

「……ん……？」

ハルヒも振り返って俺の姿を見て驚いたのか、畳然としている。

「……じつしたんだよ？」

「……じつもしないわよ。あんた……、みくるちゃんटー
じやなかつたの？」

今その話題をするのか。そんなことばどりでもここ、あらんと済ませたわ。

「す、ふ濡れじやねーか。」

「……。」

沈黙。

何も喋らないとしない、動かないとしないハルヒに業を煮やし、俺はハルヒに近づいた・・・のだが。

「……来ないで・・・。」

弱々しいハルヒの声。その違和感に俺は足を止めた。

「…………来ないでよ…………お願ひだから…………」

「一体どうしたつてんだ、雨に打たれすぎて頭おかしくなっちゃったか？」

「あ、あんたはみくるちゃんのことだけ考へていればいいの…………みくるちゃんの彼氏なんだから。」

「…………今、関係ねーだろ。風邪引くぞ。」

やはり要領を得ないハルヒの受け答え。間違いない、ここつは何か隠している。

わづげなく近づいてくるも…………。

「…………ダメなんだつたら…………」

ハルヒの力の無い怒鳴りに再び足を止められた。

「ほつとかなきや、ダメなの…………」

「…………もつ、あたしに構わないで…………」

「ハルヒ…………」

強引に足を進めたのだが、ハルヒの手が俺との間の空を切り、行く手を阻む。

「やめて…………」

ハルヒは足を止めた俺を避けながら歩き去る。ダメだ、ここでコイツに逃げられるわけにはいかない。

「おい……！」

ハルヒの手を握った瞬間、ハルヒは思い切りもがいてくる。まあ、そんなことは分かりきったことさ。俺はその抵抗を何とか受身しながら、ハルヒと小競り合いになり、最終的にハルヒの後ろから俺が抱きしめるような形で抵抗が終わる。少し恥ずかしいが、これでハルヒは逃げられない。

すると、あわてたが、ハルヒはいきなり俺の腕の中で泣き出したのである。

「…………優しくしないで……。」

がつしり掴んでるから優しくはない気もあるが、まあ、抱きしめるようなもんだから、そんなもんに感じるんだね。

「…………あたし馬鹿だから…………優しくされると…………勘違いしちゃう…………！」

一気に泣き崩れるハルヒ。おいおい、こんなに泣いてるハルヒってのは、前代未聞だぞ。

ハルヒの方も、よつやか話す気が起きたのか、全ての真相を語ってくれた。

「…………怖かった…………。」

・・・告白するのが怖かったの・・・。

・・・あんたに告白してもしふられちゃつたら、もう友達としてすらいられないかもしない。

付き合えることになつたつて、今度はみくるちゃんや有希が悲しむことになつて普通に接してあげられないかもしないもの・・・。 だつたら諦めた方が良い、その方が傷付かないって思ったのよ!・・・なのに・・・今は後悔しかしてない・・・。 「

ハルヒ・・・お前・・・。

「・・・バカよね。自分が決めたことなのに・・・

「・・・ハルヒ・・・俺は・・・」

「キヨン。」

泣いているながらにもほつきつとした口調で、俺を呼ぶ。

「・・・あたしは涼宮ハルヒ。・・・朝比奈みくるじゃないの・・・」

その時俺はどんな顔をしていたのだろう。ハルヒは・・・憂鬱顔だった。

「遅かったのよ、もう・・・。」

ハルヒは死んだよつな田つきで俺を見て、こう言つた。

「・・・ばいばい・・・。」

月曜日。

俺は、谷口を呼び出した。

何故かはわからない。だが、話を聞いてもらいたい相手が欲しかったのさ。純粹にな。

「ま、難しい問題だわな。お前らの団内だしな。」

「・・・谷口、お前なら・・・どうする?」

「俺がお前の状況だつたらか?そりゃもちろん、一人ともゲット!-(ぐつー)」

「・・・お前の爪一本一本剥がした後声帯引きずり出してやつてもいいか?」

「・・・すみません。[冗談です。」

「ふう。ま、正直面倒くせーな。」

「ひたなことならいつも・・・」

「ああ、そうだな。一人とも距離を置こうなんて考えたら、最高のマヌケだよな。」

・・・初めて谷口にまともなことを言われた気がした。

だが、今の俺にはそうすることでしか、事態を終息させることがで

きないと思っていたんだ。

「・・・キヨンよ。お前、自分が綺麗なままでいたい、そり思つてねーか？」

最近の俺は言葉を返すこともできなくなつたのか。俺はただただ谷口の言葉を聞いていたばかりだった。

「ソレまで来たるよ、お前どのみかどつちかを傷つけることになるんだぜ？答えを出すのが遅くなるほど、傷が深くなると思うぞ？」

谷口の言つとおりだった。

ハルヒを選べば朝比奈さんが、朝比奈さんを選べばハルヒが、そして、どちらも選ばなければ両方が。いや、もしかしたらあの時のハルヒの言ひ方からすれば長門はすでに傷ついているのかもしれない。俺は・・・最低だった。

「谷口・・・俺は・・・」

「ああ、もう一つだけいいか？」

「・・・ん？」

谷口は真面目な顔を一気に崩し、いつものアホ面に戻つて言つた。

「おめーの悩みは贅沢すぎるんだよおおおおーーー！」

そして別れ際、一発肩を殴つてきた。俺はどんな顔をしていたのかわからない。だが、決心は付きかけていた。

・・・贅沢、ね。確かにそうだ。

落ち着きたくて部室へ向かうと、そこには長門がいた。

「よひ。」

できるだけ普段通りに接しようと思つた。声色、大丈夫だよな？

「私は・・・」

長門が自分から喋りうつしてきた。珍しい、聞いてやることにする。

「私は・・・貴方が好きだつた。一般的な有機生命体の持つ友情的概念ではなく、有機生命体全般が経験する恋愛という概念だつた。」

おこおい、よひやく決心しかけてたのに、じじでまさかの告白か？

「正確な時間座標はわからない。だが、私といひ固体の持つ好きといつ感情は、日に日に増していくた。」

長門やーん？早くも話に付いていけなさそうなんですが・・・

「だが、私はこの恋愛的感情よりも、更に重要視するものがあった。それが・・・涼宮ハルヒ。」

・・・長門、まさかの百合疑惑爆弾発言か？

「私は彼女とその周辺に存在している有機生命体との生活が”好き

” になつた。そして、涼宮ハルヒは私にいつ言つた。『貴方は親友だ』と。』

ハルヒが？長門を親友だと言つただと？

「無論、朝比奈みくると涼宮ハルヒもその関係にあると思われる。そして私自身と朝比奈みくるも・・・そういうありたいと思つてゐる。」

なるほどな。SOS団女子団員の友情か。

「その『親友』だからこそ貴方に問う。今の貴方の関係は、貴方の・・・本当の心？」

呆然とした。

確かに朝比奈さんと付き合い始めたのは朝比奈さんの告白が原因で、結果的に俺はそれで良いと承諾した。

だが、それは果たして俺の本心なのか？俺の脳内会議で全一致したものだつたのか？

そして俺はハツとしたね。

俺には前から、ある感情があつたことにな。

「私は選択を貴方に委ねた。涼宮ハルヒと朝比奈みくるに”私”を託した。次は・・・貴方の番。」

ああ、そうだな。

今度は・・・俺が決断する番だ。

「長門。」

「・・・何？」

「・・・ありがとう。」

「・・・そつ。」

部室を出る頃には、俺の意識は完全に落ち着いていた。そして俺は別れ際の長門の言葉は、ずっと印象に残るだろう。

「・・・頑張って。」

そしてまた日が流れた。

俺は、朝比奈さんを放課後の誰もいない教室に呼び出した。 どんよりした雲間が、今から朝比奈さんにする話の残酷さを描写しているように感じられる。 だが、俺も今更引き下がることはできない。 そう思い、朝比奈さんの待つ教室に入った。

「キヨン君。 ・・・ お話つてなんでしょうか？」

单刀直入に聞いてきた。 ・・・ 朝比奈さんが、自分が怖い。 朝比奈さんにとつて残酷極まりない言葉を発して良いものか、自分自身が恐れを抱いていた。

「・・・ 一人つきりですね・・・。」

俺は気づいた。

朝比奈さんもわかつている。 俺がこれから何を言うのか知つていて。 だからこそ、話を逸らしたいのだ。

「漫画なんかだと、放課後の教室で一人きりなら・・・ キスとか禁則事項とか・・・ しますよね。」

貴方の禁則事項はやっぱり放送禁止用語だつたんですかっ！

・・・ いかんいかん、乗せられてはダメだ。 俺は決心したのだ。 ならば伝えなければならぬ。

「・・・朝比奈さん。」

「・・・どうして苗子で呼ぶんですか？」

「・・・へつ・・・・・」

その言葉だけで、どれだけ重みがあるだらうか。俺には、量りきれない程の気持ちがあつたと思う。押しつぶされそうだ。

「・・・私、ずっと思つていたんです。・・・涼宮さんに負けたくない・・・と。」

「・・・え？」

「私・・・ずっと前から知つていました。涼宮さんがいつも誰を見ていたのか。わかつてたのに・・・涼宮さんに相談しました。」

「・・・。」

「キヨン君に告白するつて。もつと仲良くなりたいからつて。・・・涼宮さんは最初びつくりしてたんですけど・・・すぐに笑つてくれました。

”任せなさい”と。・・・そう言つてくれるつてわかつていて・・・自分が卑怯だとわかつていて・・・それでも・・・それでもキヨン君の傍にいたかつたんです。」

朝比奈さんから明かされる真実。

傍から見れば、それは残忍極まりないかもしれない。だが、それだけ彼女の想いは強いのだ。誰にも責める資格なんてない。

「……私じゃ、涼宮さんの代わりにはなれませんか！？もつと・・・涼宮さんみたいに積極的になりますから・・・。もつと・・・自分自身を強くして、料理も勉強して、キヨン君の望むような女の子になりますから・・・！」

「……違つ！」

「……ほえ・・・」

そう。違う。俺は朝比奈さんは朝比奈さんのままで居て欲しい。それはハルヒにも、長門にも言えることだ。

朝比奈さんがどう変わつても、朝比奈さんは朝比奈さん。俺の大好きな、SOS団団員の一人なんだ。

「……違つうんです。・・・そんなことして欲しいんじゃない・・・。」

「……キヨン君の傍に・・・居たいんです・・・。」

次第に眼に涙を溜めていく朝比奈さん。全く同じ場所で流した涙なのに、今度のは・・・悲しくて、悔しい涙。自分はもうこの人の傍に居ることが叶わない、そんな涙。

「……俺は・・・」

言わねばならない。真実を。例えどれだけ朝比奈さんが傷ついてしまつても、自分に嘘をつくことで不幸にさせたくない。だが、それはできなかつた。

朝比奈さんは涙を溜め込んだまま俺に駆け寄り、頬に冷たく水気の

あるものを当てる。

・・・最初で最後のキスだった。

「・・・クソツ！――！」

自分のヘタレ具合、そして何より彼女に自分の本当の気持ちを素直に伝えることに躊躇してしまった自分に無性に腹が立つた。自分の一番近くにあつた机を蹴つ飛ばし、その場に立ち尽くす。悔しい。こんなことはあつてはならない。悔しそぎる・・・。

次の日、ハルヒも朝比奈さんも学校を休んでいた。

これじや想いを伝えることすらできない。あの時にきちんと伝えておけば・・・そんな後悔だけが自分に残る。

授業中も、教師の話なんて一ピコグラムも入つてこなかつた。

放課後。掃除当番が俺を見ながら『どうしたんだろうか？何かトラブルでもあつたのか？』としきりに噂していたみたいだが、そんなことはどうでも良かつた。

俺はなんの根拠も無く思った。

『このまま待つていたら、朝比奈さんは来るんじゃないだろうか？』

そして、無人の放課後にポツリと、一人自分の机に座つて待つていた。

どのくらい時間が経つたのだろうか。夕暮れ時である。

赤茶のロングヘア、その髪と同色の女子生徒が俺の傍に無言で立

つ
て
い
た。

・
・
・朝比奈さんだつ
た。

顔は俯いているためよく見えない。だが、その髪だけでわかる。朝比奈さんだ。

俺は、朝比奈さんが無言で立っているからこそ、自分の喉奥から懸命に声を引っ張り出した。

「……貴方と付き合っている間、本当に楽しかった。誰かに必要とされることがあんなに乐しいことなんて、初めて知りました。貴方となれば、上手くやつていけると思いました。……このまま。」

「……それは本当だ。朝比奈さんとなれば上手くやつていける。それは、誰もが思つこと。朝比奈さんほどの女性なんか、この世にあんまりいないだろ。」

「……でも、ダメなんですよ。」

俺も立ち上がり、決心をつくる。大事なこの声が裏返つたりするなよ、俺？

「……俺、最低な」としてました。朝比奈さんと居ながら、違う奴のことを見てました。……そのことに気づいてからも、結果的には黙っていました。

「……貴方の優しさに甘えて……。」

そうだ。朝比奈さんとデートをしてくる時も、心ここにあらず状態だった。……俺は最低だった。

「俺…………俺が好きなのは…………」

勇気を持て、俺。もう、逃げるなよ？

「…………涼宮ハルヒなんです…………すみません…………。」

すると、空気が変わったような気がした。

「キヨン…………」

「…………え？」

聞き覚えのある声だ。…………だが、朝比奈さんじゃ、無い…………？
その人物は俺に近づくと、俺の腕を掴み…………泣いていた。

「…………ハルヒ…………！？」

髪型は朝比奈さんそのものだ。だが、顔はハルヒ。…………どうなつてるんだ？

「お前どいつも……いや、その髪は…………？」

ハルヒは顔を大粒の涙でグシャグシャにしながら、髪を抜く動作をした。すると、朝比奈さんの髪型はそのままじつそり取れ、いつもハルヒの髪が現れる。

「…………エクステだったのか…………？」

ハルヒは泣き笑いして言った。

「…………怒られちゃった…………。」

「・・・え?」

「・・・みくるちやんが言ったの、『逃げるな』って・・・」

朝比奈さんが・・・?

「・・・あたし・・・ずつとこままで良かった・・・みくるちやんが有希を傷つけてまであんたを選ぶような、そんな汚いことはしたくなかったから・・・!」

・・・だけどあの子が言つて、『それは無理ですよ』って・・・!『もう遅いですよ』って・・・!『本気でキヨンが好きなら、もう逃げちゃダメだ』って・・・!

『私達、どのみち傷つくしかないですから』『同じ人を好きになつちやつたんですから』『同じことも言われたの・・・!』

・・・みくるちやんも有希も・・・今頃、きつと泣いてる・・・

「・・・。」

やはり朝比奈さんはわかっていた。

俺が誰を好きなのかも、自分が負けたところとかも。全部知つて、ハルヒに話したんだ。長門も、ハルヒに全てを託したのだ。自分の可能性を全て捨てて。

「・・・本当に・・・遅かったのよね、あたし達・・・。『付くのも・・・』『まかすのも・・・』『やめの・・・』」

あ、そうだな。

俺はハルヒが好きだとこつ気持ちから逃げていたのかもしれない。

そんなことは事実に反するといつレッテルを貼り付けて、勝手に納得していただけだ。

そして、今回のことを持ちこぼしてしまった。・・・遅すぎだよな、全くやれやれだ。

「・・・でも、もう傷つくのはこれで最後にするの。みぐるみやんも、有希も、あたしも・・・キヨンも。」

「・・・ああ。」

そして、俺とハルヒは向き合つ。やり直しを宣言するために。多分、朝比奈さんがしたように、ハルヒが話を振つてくるんだろう。そういうところは、負けず嫌いのハルヒがじこからな。

「・・・好きです・・・キヨン。・・・すつと・・・すつと・・・好きでした・・・！」

後日談になる。

俺は朝比奈さんに再度謝罪の言葉を直接言つた。朝比奈さんには謝つても謝りきれないからな。でも返事はこいつだった。

「謝りないで下さい。謝られてそれを許してしまつと、全部嘘みたいに思えちゃいます。私・・・あの時間を大切な思い出にしたいんです。楽しかったこと・・・辛かったこと。全部です。・・・だから、謝らないで下さい。」

「・・・わかりました。・・・ありがとうございました・・・！」

そして放課後。

ハルヒと俺は、現在下駄箱にいる。これから一人で下校つてとこだ。

「ああ、そういうや今までの口囃どりすんだ？何か遊びに行くつて言ってなかつたつけか？」

「・・・あつーごめん、それキャンセル。」

「え？」

「久しづりにね、みくるちゃんと有希が、買い物に行きたいって。
だーかーら、それ無理」

なるほどな。ハルヒと朝比奈たちの間柄も、仲直りしたつてわけか。
やれやれ、長い道のりだつたな。

俺も人のこと言える立場じやないが。

「それじゃ、仕方ねーな。」

「そ。仕方ないの！」

ハルヒは笑顔を見せた。そう、SOS団専用スマイル。100Wの
笑顔だ。

帰り道。

「最近暑いわねえ。」

「やつだな。もう夏休みなんだかい、納得できなことでもなにか、最高気温37度つてのは異常だよな。」

「……ねえ、本当にあたしで良かったの？」

「……は？」

「やつぱり……みくらひやんと一緒に居た方が居心地良かつたって思つてない？」

いきなり何を言つ出すんだ、マイナ。全く、ずっとこんな会話が暫く続くなのか？
やれやれ、俺も相当な苦労人だつよ。

「あのなあ……こへりなんでもねつや怒るぞ。」

「うそ、怒つて。……やしたら、かよつとおひでさるから……。」

「

「やれやれ、それ随分屈折してゐる。面倒くせこつたりあつやしない。」

「

「……じゃあ、もつとわかつやすくストレートで。」

ハルヒは俺の肩に手を置き、つま先を伸ばして顔を近づけ、頭と顔
が重なる・・・って何堂々と帰り道でやつてんだ！？

俺は急いで辺りを見回した。その速度は、トムソンガゼルをも超越
するだろ？

「・・・お、おいーお前なあ・・・」

「・・・へへつ・・・」

恥ずかしそうに笑みをこぼすハルヒ。しあうがない、今回だけだぞ。
ハルヒは唐突に俺の腕に自分の腕を絡ませ、顔を寄せる。
おいおい、傍からみりやただのバカツブルだぞ、俺達。・・・まあ
何と言うか、右から少しいい匂いが・・・って何考えてんだ俺！し
っかりしろ俺！

「キヨン・・・好きだからね？」

今更のような確認の言葉。だが、それは紛れも無い本心。
だからこそ、俺はあえて笑うだけで何も言わない。
・・・え？ズルいだと？知つたことか、好きなだけ羨ましがるがい
い。

「夏ね・・・」

「ああ・・・。」

そつ、俺達の夏は始まつたばかりだ。

}
Fin
{

8 ～書き合ひ～（後書き）

お疲れ様でした（ へへへ ）

やはりアニメを参考にしていたということで、かなり今回は書きやすい小説になりました。

これを機に、人生というものを改めて見てみたりしていただけたらなあ、と思ひばかりです ｗｗ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8305m/>

HRUNNAD ~もう一つの世界 ハルヒ編~

2010年10月9日21時48分発行